

寺島和美作 「ほほえみ白書」

(効果音) (教室のガヤ)

男子A あ、先生だ。

男子B お、早く席に着け。

男子A 起立。礼！

(全員) おはようございます。

男子A 着席。

先生 えー、では学活を始めます。欠席は… 谷口だけか。連絡が入ってなかったが…。えーっと今日の予定は… 2限の現国と 5 限の生物が先生の都合で入れ替わって…。

(効果音) (教室の戸が強く開けられる)

谷口弘子 すいません。遅くなりました。

先生 なんだ、谷口。遅刻か。2 学期になる早々、たるんでるぞ。

弘子 日えー、すいません。

(全員) (笑い)

先生 こら！ ほかの者も同じだぞ。夏休みはもう終わったんだからな。

(全員) (反応のガヤ)

先生 えー静かに。それじゃ時間割の変更はいいな？ これで学活は終わり。

男子A 起立。礼。着席。

(全員) (ガヤ)

戸田恵子 ちょっとヒロ、どうしたのよ、遅刻なんかして。

弘子 それがさあ、朝になってスカートのボタンが取れちゃったの。少し太ったのかしら。

恵子 バカねえ。ほかのスカートはいてくればいいのに。ここの高校は私服許可してるんだもの。わざわざ暑苦しい制服なんか着てくることないのに。

弘子 うーん、だけど高校生だし。でも、今日の恵子の真っ赤なスカートは、なかなかナウいよ。

恵子 (笑い) ぶりっこスカート。

弘子 ヤだ、恵子ったら。

二人 (笑い)

ナレーション 谷口弘子と戸田恵子は、都立青春高校の 2 年生。楽しみにしていた夏休みもあつと言う間に過ぎ去り、2 学期が始まりましたが、まだまだ夏休み気分が抜け切らずにいるのです。

女子A ねえねえ知ってる？ A組の戸田さん、夏休み中に彼氏ができたらしいわよ。

女子B えー、ほんとに？

女子A ほんとよ。おまけに、相手がだれだと思う？ サッカー部の山口先輩だって。

女子B うっそー、ヤだー。ショック…。わたしも山口先輩はひそかにあこがれていたのに。でも、そう言えば、戸田さん、パーマとかかけて最近きれいになったもの。

女子A うん。でもいつも一緒にいる谷口さんは、あんまりパツとしないわね。いつも制服だし。

女子B そうそう。戸田さんの引き立て役なんじゃない？ でも仕方ないわよ。あの人、ほら、クリスチャンとかで、お堅くて、“清く正しく”ってのじゃないの？

女子A なーるほどね。あ、うわさをすれば戸田さんたちが来るわよ。

恵子 あら、こんなところでなんの話？

女子A うん。大したことじゃないけど、最近、戸田さんきれいになったってね。

女子B 何か原因があるんじゃないかって。もし美くなる秘けつがあるなら、谷口さんにも教えてあげればいいのかって。(Aに)ねえ？

女子A ほんと。

恵子 ちょっと、それどういう意味よ？ ハッキリ言いなさいよ。

女子A 別に意味なんて…。

女子B (Aに)ねえ、行こうよ。

女子A それじゃ、失礼。

恵子 何あれ？ まったく、イヤらしい。きつとっとしてるのよ。わたしがパーマかけたもんだから。

弘子 でも、本当。最近、恵子きれいになったよ。パーマのせいなのかな？

恵子 ウフーン。実は少しお化粧してるんだ。

弘子 えー、そう言えば唇きれいな色してるし。目の周りも。そうだったの。でもわたしたちまだ高校生よ。

恵子 もうヒロは古いんだから。今じゃタケノコ族も中学生の時代なのよ。高校生がお化粧したって、ちっともおかしくないわ。

弘子 でも恵子、急にお化粧し始めるなんて、どうして？

恵子 うーん。まあヒロはわたしの親友だし、特別に教えてあげよう。サッカー部の山口先輩って知ってる？

弘子 あ、あの背の高い…。

恵子 そうそう。彼とね、夏休み中、たまたまプールで一緒になって、その時、一緒に泳いで以来、付き合っているのよ。

弘子 えー、だって山口先輩って、すごくモテるでしょ。

恵子 だから、わたしもきれいにしてないと釣り合わないんよ。

弘子 なるほど、そうだったの。

恵子 ねえヒロ、付き合ってよ。今日ね、わたしの行きつけのファッションプラザが 1

割引きなのよ。一緒に行こうよ。

弘子　　う、うん。でも、どうしよう。(モノローグ)わたし、まだ化粧なんて。それに学校に来るときは、制服が一番楽だし。でも、恵子はほんとにきれいになったわ。わたしもきれいにはなりたい。そうよ、きれいになることは何も悪いことじゃないわ。

恵子　　ねえヒロ、行こうよ。

弘子　　うん。一緒に行くわ。

ナレーション　　こうして二人は、渋谷の街に出かけたのでした。そこで入った店の中は、弘子にはすべてが新しいもので、とても魅力的でした。

恵子　　ねえねえ、このキラキラの星型のピン、ヒロに合いそう。

弘子　　えー、こんな赤いの、派手すぎて…。

恵子　　大丈夫よ。ヒロは髪の毛まっすぐだから、このくらい赤いピン着けないと、アクセントがつかないよ。

弘子　　ホント？　じゃあちよっと着けてみようかな。着けてみるだけね。

恵子　　それと、ヒロ、少し髪の毛巻いてごらんよ。大人っぽくなるよ。

ナレーション　　その夜、弘子は慣れない手つきで髪の毛を巻き、次の日、赤いピンをして学校に行ったのでした。

恵子　　おはよう、ヒロ。あ、ピン。うん、かわいいよ。髪の毛もちゃんと巻けてるし。きれいきれい。でもその制服がイマイチなあ。やっぱりヒロも私服にしたら？　ヒロはやせてるんだから、白いフワーツとしたスカートなんか合いそう。

弘子　　白い、フワーツとしたスカート…。わたしに似合うかな。

恵子　　うん。絶対似合うよ。

弘子　　うん。じゃあ、明日は私服にしようかな。本当は前に買ってあったんだけど、似合うかどうか心配で…。

恵子　　ヒロなら絶対大丈夫。明日、着ておいで。ね？

弘子　　うん。

ナレーション　　こうして弘子は、始めは赤い一つのピンを着けるだけでしたが、だんだん服装を変えて、ネックレスを着け、ブレスレット、そして少しお化粧までするようになったのでした。そんなある土曜日の夜――。

(効果音)　　(電話のベル)

恵子(フィルター音)　　あ、ヒロ？　わたし、恵子。ねえ明日、また渋谷に行かない？　日曜日って割と掘り出し物があるんだよね。かわいいスカートとか、Tシャツとか安くなって…。

弘子　　うん。でも日曜は教会が…。

恵子(フィルター音)　　またあ。そんなこと言ってるからダサイなんて言われるんだよ。教会、1回休んでも大丈夫でしょ？

弘子　　1回だけ…。うん、1回だけなら。

恵子 それじゃあキマリ。明日の 10 時に駅の改札で待ってるからね。バイバイ。
(効果音) (受話器を置く音)

弘子(モノローグ) 本当に、本当にこれっきり。わたしはもう十分にきれいになった。明日だけ礼拝休んだって。でもわたし、本当にきれいになったのかしら？

ナレーション 次の日、弘子は、一抹の後ろめたさを感じながらも、“きれいになりたい”という思いに勝てずに、恵子と二人で日曜日の渋谷の街に出かけたのでした。そして一日中歩き回った帰り道、ぼったり教会学校の高等課の井東先生に会ったのです。

井東 (オフから)谷口さーん、谷口さん。

弘子 あ、先生。

井東 やっぱり谷口さんだった。今日はどうしたの？ 礼拝も休んでたから、具合でも悪いのかと思って。

弘子 あ、今日はちょっと学校の用事があって…。すいません。

井東 いや、病気じゃなければいいんだけど。ああそうそう、夏休みの教会のキャンプの写真、できてきたよ。今週中にでも送ってあげるね。とてもよく写ってたよ。

弘子 あ、すいません。

井東 谷口さん、少し変わったね。

弘子 え？

井東 あ、私服のせいかな。いや、気にしないで。それじゃ来週はおいでね。さようなら。

弘子 あ、さようなら。(モノローグ)“感じが変わった”って、きれいになったっていうことかしら。でも、そしたらあんな言い方しないはずだわ。

ナレーション 日曜日の井東先生の言葉が妙に弘子の心に引っ掛かり、吹っ切れないままでした。そんなある日の学校の帰り道――。

恵子 だから新宿のミルクのケーキはねえ…。

男子A (口笛で「ヒュー」)彼女、お茶しない？

恵子 あら、口笛の上手はお兄さんはだれかしら？

男子A オレ？ オレ、東高のヒデさん。

男子B 同じく東高のケンさんよ！

恵子 わたし、青春高の恵子よ。

男子B へえー、青春高か。なかなか色っぽいよ。そっちの彼女は？

弘子 え？ わたし？ わたしは…。あ、ごめん、わたし今日、用事があったの忘れてた。先に帰る。ごめん恵子、バイバイ。

男子A なんだ、ありゃ？

恵子 あ、ヒロ、ヒロ！ まったくもう…。

弘子(モノローグ) わたし、わたし、今まであんなにすてきに見えていたものが、キラキラのピンや

白いスカートがつまらないものに…。気持ちがスツと引いていくのが分かる。どうして？ わたし、今まで一体何してたんだろう？

(効果音)

[弘子の子のドアを開ける音]

弘子

ただいま。

母

お帰りなさい。今日は早いね。あ、そうそう。教会から手紙が来てるわ。表に“写真在沖”って書いてあったけど。

弘子

あ、キャンプの写真だわ。

ナレーション

弘子は、母の手から手紙をひったくようにとり、封を切りました。

弘子(モノローグ)

あ、わたし、あの時、こんな顔してたんだ。あの時は本当に楽しかった。

ナレーション

弘子はその時、今の自分の心の中に、あの時のような喜びが失われていることにハッと気づいたのです。彼女は同封されていた井東先生の手紙を読み始めました。

弘子

谷口さん、キャンプの時の写真送ります。楽しかった思い出がまたよみがえりますね。(途中から井東先生の声に)この間は失礼なこと言ったかもしれないけど、でも僕の本当の気持ちです。僕は、お化粧できれいにした今のあなたより、飾らず、無邪気にほほえんでいる写真のあなたが好きです。人の美しさは、外側よりも心の内側が磨かれたとき。あなたが神様にすべてのことを感謝して、喜びにあふれているときに、僕は一番美しいと思います。

弘子(モノローグ)

神様にすべてのことを感謝して、喜びにあふれているとき…。わたし、間違っていた。

ナレーション

弘子は、そうつぶやきながら、写真の中でほほえんでいる自分を、もう一度まじまじと見つめたのでした。

<完>